

方道路の改良の急が叫ばれておる際、國産タールが道路鋪裝方面に多量要求せらるゝ將來を考へて以上の如きコールタール生産量の増加の傾向は意を強くするに足ると考へらるゝのであります。

アフガニスタン通信 (四)

カプールにて 池 本 泰 兒

四日朝此處を午前八時に出發しました。寒い日でした。

岩山の峠を三つも越え、谷の道を傳ひながら歩きました。

快晴なので一面の山の雪は銀の様に輝いて居ました。或る

村では樹氷が美しく、ほんとうに美しく日光に輝いて居り

ました。私は此の霧氷といふものを見たのは初めてです。

長崎の温泉岳は此の霧氷で有名な處です。私は長崎に居た

頃一度夫れを見たいと思つて居たのですが、遂に見る機會

がありませんでした。下關の牧野所長が霧氷なんて伯林の

街の中だつてあるぜ、さう珍らしがるに當らないよと云は

れたのですが、私は此の美しい霧氷を初めて此處で見まし

た。此の人里離れた山の中で伯林を思つても見たことです。樹木ばかりでなく私の口鼻に呼吸の水蒸氣が氷つて之れが眞白に霧氷になつたのも之れも伯林かと獨りで笑ひ出ししました。

午前十時に街道へ出ましたが、街道は一面の雪で自動車の通つた跡はありませんでした。此處からカプールまで未だ三十五里程もありますから、更に歩くと云ふ元氣もありませんので、又數日滞在かと考へ乍ら宿場へ行つて見ましたら、其處にカプールに向つて行く乗合自動車が一臺止まつてゐました。聞いて見るとガズニ地方から來てもう此處

に一週間滞在してゐると云ふのです。一臺は雪に滑つて轉覆したとかで車體が四五度傾斜して隨分壞れてゐました。此の宿場へたどり着くのに隨分難行したものと見えます。夫れでも二臺共明日はカブールに向かつて出發する。もう

その後は十日位は乗合自動車は杜絶だらうと云ふことでした。他に仕方もありませんから一晚宿まつて明日を待つことにしました。運轉手達の入つてゐた眞黒な部屋の火爐に入り込んで横になりました。其の晩は殆んど歩くことも出来ない程筋肉が硬ばつて痛みやつと食事をして寢ました。疲れ過ぎてゐるので横になつても眠れません。寒いので夜通し火をたきました。木賃宿ですから薪も自分で買ひ、食事も食べるものを命じ、運轉手達や他のお客達と同宿です。之れ等の私の世話私のボーイのアジザマが何でもやつて呉れました。アジザマは仲々いゝ男です。良くやつて呉れます。今カブールに居る日本人中で一番いゝボーイに當つたと思つてゐます。他の人は私が來てから誰でも二、三人取り換へ、最も多い人は二、三十人から取り換へたといふ

位ですが、私は來た時雇つただけで一度も更へる必要を感じません。尤も給料は私が一番高く出してゐる様です。然し之れは商務次官がさう決めて呉れたのですから仕方がありません。

次の日三月五日午後一時頃まで自動車を修繕してゐてやつと二臺が一緒に出發しました。此の時まで未だアスマイヤル達は到着しませんでしたから其の儘出發しました。道路上の雪は二〇糎位でしたせうが、夫れでも自動車には大變な難行です。然し人家のある處は一車線だけ除雪してありました。處が半分程の道を來た頃トラクターに依る除雪車がカブールの方から來てゐて除雪してゐるのに會ひました。其の除雪してある部分は時になつてゐて、隨分粉雪の深い處で通れるかと案じてゐた處だつたので、ほんとうに嬉しいと思ひました。除雪車の恩恵を受けたのも之れが初めてです。然し一車線だけの除雪ですから、自動車には仲々難行です。とうとう一臺は深い轍の中に落ち込んで押しても引いても動かなくなつたので、夫れを其處に残して

他の壊れかゝつた自動車に皆乗り換へて行きました。峠の頂上で此處まで歩いて來たアスマイヤル達の一行に會ひました。彼等は街道に乗合自動車の通つて居ないことを聞いて四〇里近くの道を歩く氣で私達と別の道を通つて來たさうです。人の通つてゐない股まである雪の中をこいで、歩きづめたつたさうです。皆雪の強い反射で眼を痛めてたゞれ眼になつてゐました。犬達も居ました。

然し夫れから一時間も行つた頃自動車は雪の吹だまりへ滑り込んで動けなくなりました。午後六時頃でした。冷めたい風は體中凍る程であります。幸ひなことには其處はカプールまで九里程ある峠の入口になつてゐて、カプールに入る旅客、荷物、武器等を調べる關所のある處だつたので其の建物に宿る交渉をして、火燵の中に入り込んでしまひました。

關所と云へば、カプール市は銃器の携帯を禁じて居りますので、カプールへ入る人の銃器を調べます。カプールから放射する諸街道の口に夫々ある様です。處で銃器はカプ

ール市外の土地は其の携帯は自由であると見え、又自由と云ふのみならず其の携帯が必要と見えて、數人の旅行者は必ず一人位は鐵砲を持つてゐます。兵隊銃です。又民家にも此の自警團が居ます。私共の現場調査をする時には村人が案内しますが、其の自警團が五、六人は必ず附いて來ます。立派なピストルなどを持つてゐる人もあります。自警するのみならず一朝事のある時、之れ等の村人達は夫れ自身強い軍隊になるのでないかと思ひます。

六日朝午前九時九里の道を歩く決心で出發しました。然し二里も歩いた頃もう雪は全く無くなつてゐました。カプールは多少暖かいと見えて雪は幾らか降つたけれど直ぐ消えた様です。幸ひ其の邊で一臺の乗合馬車を拾つて、二人分席があつたので私とアジザマとだけ夫れに乗つてカプールに正午過ぎ歸りました。カプールの街はお祭りの最終日であり、着物を着て随分賑つてゐました。自分の家に入つた時にはほんとうに助かつた様な氣がしました。早速公使館へ歸つた報告に行きました。處が門衛へ之れはアフガン人

の兵隊です。がどうしても入ることを許して呉れません。日本人だと云つてもいやさうでないと云つて聞きません。やつと兵隊附で玄關まで送りつけられ、館員に引き渡されたのです。

實は私は現場服を着て、帽子はアフガン風のターバンにしてゐたのです。又人並にとワルダークに居た此の二十日間餘も一度も髭を剃らなかつたので、口髭も顎髭も延び放題で、顔の色は雪焼で眞黒になつてゐたのです。公使館を出る時も又門衛にお前は日本人ぢやない、何の用事で行つたのだと聞かれました。夫れから他の日本人の處へ挨拶に行つたのですが、皆に門衛にさう云はれたのは門衛が悪いのぢやないよ、當り前だよと云はれました。早速散髪屋へ行きました。

七日役所へ行きましたら、次官も大臣も色が黒くなつたと聲を擧げて笑ひました。

荷物は其の後九日目にやつと返つて來ました。自動車の運転手はワルダークには未だ雪があると云つてゐました。

三月の二十五日まで、晝も夜も其の平面圖の仕上げにかゝりました。圖面の一枚は七米の長さあります。他に其の平面圖に入らない部分が多圖になつて夫れが三米あり、尙縦斷圖が一枚ありました。圖面は美しく出來ましたが、地形圖は雪の上の而かも三日間でのスケッチですから多少不安でもありましたが他に仕方がありませんから、別に測量復命書に、積雪があつて完全な測量が出來なかつたこと、及びシーメンス會社の技師の指定した構造物の位置は落差が二・三米しかなく、然かも其の水位を得るためには廣大なる良耕地を貯水池にしなければならぬ。今多少水路を延長すれば、此の水位を擧げるための貯水池は要らないから、自分は落差三五米の別の路線を可と認め、其の測量も爲したと書いて三月二十六日に大臣の處へ提出しました。大臣は立派に出來てゐると云つて、丁度閉議の日だつたので夫れを總理大臣にも見せると云つて持つて行きました。

其の後其の圖面はシーメンス會社の方に見積りをさせるために渡された様です。私は唯平面圖を造るだけに使はれ

たことになつてゐて、人を侮辱するなど多少穩かならぬ氣持でありました。

四月十六日に次官が、シーメンズの技師が打ち合せをしたいさうだから其の家へ行けと云ひましたので行つて見ましたら、二枚の平圖に於て、同じでなければならぬ部分が喰ひ違つてゐる、耕地のもつと精確な等高線をとれ、河の横斷面圖を取れのと云ひ出しました。私はお前が發電所を造る位置さへ判つきり現場を決めれば、何處でも容易に測量は出来るんだ。現場へ行つてきめるとも云つたのですが、そんなことは出来ないとも云ひました。實際、測量をする場合、何處へどんな構造物を造るのか判らないで平面圖を造り、夫れでどう設計を樹てゝも間違ひのないと云ふ不要と思はれる部分までの廣大な平面圖を造るなんて容易なことでないとは私は考へます。色々聞いてみましたら、シーメンズの技師は初の自分の考へた位置に矢張り取り入れ口及發電所の構造物を造るつもりらしく、夫れでは落差が足りないから、取入口の處の堰堤を高くして落差の二三

米を二六米にして、平水位で平均電力を起し、尖頭電力を金曜日の休電日に貯水しやうと云ふ考へらしいです。だから水路の位置も、貯水池の大きさも總て私の測量したものと會はないことになつたのを其の様に私に説明しないで、唯お前の測量が間違つてゐるから夫れをやり直せと云ふ風に云つてゐるのであります。私が色々つゝこんで聞くとお前の英語は判らんと云つて聞かないです。

私は此の時にもう俺はどんなことがあつてもシーメンズ會社の下働の様な仕事をするとは辭ると決心しました。このためには解約をさへ決心しました。

四月二十日に役所でシーメンズ會社の技師に會つた處が大官がお前に渡して呉れとのことだつたとて、追加測量の指示を書いたものを私に渡しました。之れは大官宛のものであつて大臣から更に私に命ずる様にするべきを、直接に會社から私に渡されることになつたのです。之れには池本の前の測量は間違つてゐるから之れ等の諸點を精確に測量する様に嚴重に命じて呉れとあつて、其の諸點と云ふのが

盡く變更設計に依る追加測量なのであります。然も寫しを三枚とらせるともありません。

二十一日はシーメンスの技師が總理大臣と商務大臣とをワルダークの發電所設置箇所へ案内した様です。私には全然其の話はありませんでした。

二十五日に私は役所へ自分はアフガニスタン政府の命令に依つては仕事するが、他の會社の下働は拒絶する。今後シーメンス會社の下働の如き仕事をするのだつたら契約を解除して呉れと書類を出しました。其の時次官はお前は獨自の立場で仕事してゐるのでないかと云ひましたが、否や、シーメンス會社の指示のあるものは俺は嫌だと云ひました。

解約することも充分決心してゐるのですが、次の日からも知らん顔をして毎日出勤してゐました。出勤すると云つても私の席は役所にはないのでから唯毎朝、大臣と次官に會ひに行くだけです。用のない時は次官だけに、挨拶して歸つて來るのです。この毎朝役所へ行くのは外人技師では

私だけやつてゐることです。他の地方に居る人は別ですがれどカブールに居る他の土木技師は既に現場を持つてゐますから、其の方が忙しいので用のある時だけしか役所に出ません。尾崎農林技師は農園を三つも持つてゐますから又用のある時だけです。近藤建築技師は陸軍省ですが、之れは役所に机があるので終日役所に居られる様です。處で私は朝一時間程役所に行くだけですけれど、家で書く様にアフガニスタンの地圖を命ぜられてゐるので、夫れを自宅でずつと書いて居ます。此のことは項を別に書いて書いて見たいと思つてゐます。

五月十四日に役所へ行きましたら農業局長が、總理大臣から商務大臣宛にして、池本技師をして二十日間の豫定にてワルダークに出張せしめ、發電所に關する測量を完成せしむべしと云ふ命令が來てゐるぜと云ひました。俺には別に商務大臣から話があるだらうと聞きましたらさうだと云ひました。斯ういふ風に出られては俺も又ワルダークへ行かなければならないのかなとも考へました。

處が十六日に次官から、ワルダークの發電所工事は土木省でやることになつたのだが、今まで君が關係して居たのだから其の測量の完成をさせて呉れと總理大臣から云つて來たのだが、君はやつて呉れるか、別に命令すると云ふのではない、お前の考へを聞きたいのだ。又其の測量をする とすれば、どうしてもシーメンズ會社の技師に依つて指示は受けることにはなると云ひました。私は明日まで考へさせて呉れと其の日は歸りました。次の日私は次官に其の仕事を受けることは出來ないと辭りました。そして自分としては、當國は水が少ないので耕地が少ない、又大きな工費を投じて灌漑用堰堤を造り耕地を僅かに擴げてゐるのにシーメンズの技師の設計では、避けられるものを態々廣大な耕地を貯水池にしてゐる。設計上の考へも違ふのだから尙更自分には其の仕事をやるとは出來ないと云つて歸りました。

十九日に大臣が、私の辭表の翻譯したものを鞆の中から出して、お前は辭表を出したのだが其の必要はないのだ。

自分として別に歐洲人の技師と亞細亞人の技師とを區別すると云ふ様な考へはない。唯人が足りないから君に丁度其の様な仕事をやつて貰ふことになつたに過ぎない。やめるなんて云はないでやつて見て呉れないかと云ひました。私は斯う云はれては斷れないので、夫れではやりませうと答へました。さうしたら明日伊太利人技師ヨリオと、土木省の獨逸人技師のシーマと、シーメンズの技師とでワルダークへ行つてお前の意見が正しいかシーメンズの技師の云ふ處がいゝか協議して呉れと云ひました。

之れ等の話は公使館の朝倉通譯生の通譯に依るものですが、私との話のあとで、大臣は朝倉さんに、更に一名日本から土木技師を招きたいから其の手續をして呉れと云ひました。之れで私の他に二人の人に來て貰ひたいと云ふことになります。

此の國には尙施工せらる可き仕事は相當あるにはあります。夫れにしても私自身は此の一年近くの間、設計もし又數箇所の調査もやつたのですが、未だ實際に着手した仕事

はありません。私が他國人に比して良く働いて見せたこと云ふ様なことは少しも考へられません。夫れですから次々に日本から土木技師を呼ぶ理由が判らないで居ります。又農業關係でも、山林技師は既に決まつて八月あたり見えることになつて居り、其の他にも園藝及び鶏の方の一人と農學校の先生一人とを目下交渉中でもありますから、尾崎農林技師の働き振りが、日本人が働くと考へさせたのかも知れません。何れにしても私としては、自分が立派に働いたから夫れで次々に新らしい人が呼ばれるのだなどと申し上げる自信はお恥しいことながら今の處全然ありません。然し三人になれば、今までよりも私は楽しく、力強く働けるであらうと喜んで居ります。

翌日の二十日には朝から大雨になりました。夫れで此の日は皆で土木省に集まつて、土木大臣もアフガン人の土木技師や關係者の前でシーメンズの技師と私とが自分の考へを説明しました。シーメンズの技師は獨逸語でやります。土木省にはアフガン人の土木技師も居て、夫れ等は獨逸、

伊太利に留學した人ですから、獨逸語も伊太利語も判ります。獨逸人技師シーマと云ふのはもう四年から居てベルンヤ語も達者です。私は此の席で尖頭電力が三〇〇〇KWを要することを初めて大臣から聞いた程何も計畫に就て知らされずに居たものですから又其の上こんな會議にむかゝしてゐるのですから英語だつて仲々話せません。此の頃は日常のことならペルンヤ語で大體間に合ふのですが、外人技師等と會議するとなつて、自分の意見を述べて相手を納得させると云ふ話術になると全く駄目です。英語だつて出来ません。私には話術の懸引きなんて日本語の他出来さうにありません。そして日本語は全く通じませんから會議で人をやり込めるなんて何時までたつても出来さうにありません。まあ各位のうち、どなたか英語のお出来になるとお考への方が、英語をつかつて日本語の人と自分の名譽を賭ける程のはげしい議論をして見て下さい。どの位情ないものか、はがゆいものか多少とも同情して頂けるかと思ひます。

又幾ら勉強して来て居るとは云へ私にとつては發電所は全くやつたことのない仕事です。夫れに相當なシーメンス會社から派遣せられた發電所の技師です。

二十四日に全員揃つて實地檢分に行きました。ワルグラークも今になつて見ると樹木も茂り、田も青々としてみました。冬の測量の時とはほんとうに見違へる程青々としておりました。土木技師シーマは道路ばかりやつてゐたのですから、發電所のこととはさう判つきり知つてゐる筈はないのですが、シーメンス技師の指圖でやつてゐるのですから仲々色々のことを云ひます。當然シーメンス技師の意見通りです。伊太利人ヨリオは私の意見に賛成でありました。其の夕方カプールに歸りました。

次の日又土木省に集まつて協議したのですが、シーマは自分の云ふことだけ云つて、私が自分の意見を説明しても、お前の英語は判らないとか又話してゐても態と立つて行つたりして聞かうともしません。そして向ふの意見で復命書を書き出したので私は別に復命書を出すと云ひました

ので明朝十時に持つて集まると云ふ約束で散會しました。

翌二十六日に土木省へ私は復命書を持つて行きました。

其の復命書の大略は「當國は多大な工費をかけて耕地を造つてゐるのに、今發電所を造るに避け得られる廣大な(約一〇〇町歩)良田を潰すのは大なる矛盾である。然もシーメンスは落差二六米に取らうとしてゐるが、之れを三六米にすれば、平水で尖頭電力を起し得る。又灌溉も支障なく出来る。然るに落差二六米にすれば平時電力を平水に依つて得るのだから、尖頭電力は金曜日等の休電日に貯水しなければならぬ。だから廣大なる貯水池を要する。又水路の延長は短くなるが、水路の断面及壓力鐵管及タービンは大きくなる」など地形に依つて説明して置きました。之れを先づシーマが讀みました。そして自分の持つて來た復命書をベルシャ語で説明した儘提出しないで引込めてしまひました。今日はシーマは昨日までに打つて變つて私の氣嫌を取るかの様に、お前はアフガニスタンが氣に入つたか、毎日どんな料理を食べてゐるか、日本料理か、日本人は魚

を食べるさうだが、此の國の河魚でも何處でとれるのは甘い。獨逸人も一週に三日は魚を食ふ。海岸線のある魚を食ふ人種は頭がいい。夫れは燐を含んで居るからだ、などと云ひました。斯んなことを云ふ處を聞いて居ると今までの様に押しつけがましい態度をやめて多少敬意を表して來たのぢやないかなどと獨りで考へました。

五月二十八日に役所から總理大臣の官邸に午後四時半に行く様にと通知がありました。行つて見ましたら、既に伊太利人技師ヨリオも、獨逸人技師シーマ、及びシーメンスの技師、及土木大臣、其の他關係者が來てゐました。私が行つてから總理大臣の處に全部集まつて、先づ私の報告書の翻譯したものを讀み、次にシーマがベルシャ語で反對の意見を述べ、次にヨリオが、伊太利語で池本の意見に依るものが經濟的で夫れに賛成だと云ひました。

總理大臣は別に夫れ等の討議を聞かうとする意志は無くもう初めから云ふことを決めてゐたと云ふ風でしたが「各位が斯く當國のため熱心に考へて頂くことは感謝に耐へな

い。此のワルダークの發電所に就ては、其の機械等を一切シーメンズ會社から購入することになつてゐるのだから、シーメンズ會社に一切の責任を以つてやつて貰はなければならぬ。就てはシーメンズ會社の技師に依つて提案された方法によつて施工したい。尙池本技師には他に重要な仕事をやつて貰ふ。明後日商務大臣より話があらう。」と云ひました。シーマは此の時「池本技師が、本工事に非常な努力をせられたことに感謝するものである。」とか云つて散會になりました。私は初から終りまで黙まつて居りました。結局さう成るであらうと思つてゐた様になつたのだしシーメンズ會社の下働をすることは之れで解消してしまつたことだし、私は甚だ朗かになつて歸りました。

此の辭表を出したと云ふことに就ては他の在留邦人の方にも随分御心配もかけましたが、之れで一段落ついた譯です。此の文章もだら／＼と随分長たらしいものになりましたが、此處で一度打ち切ります。(昭和十一年二月二十日に書出し、六月十三日に書き終る。カプールにて。)